



米山奨学生・学友の就職支援に関する調査

調査結果レポート

【要約版】

2007年5月

財団法人ロータリー米山記念奨学会

「米山奨学生・学友の就職支援に関する調査」

調査結果レポート【要約版】

目次

第1章	調査の背景と目的	1
第2章	調査の概要	2
第3章	各調査の総括	3
1.	現役米山奨学生に対する日本での就職意識調査	3
2.	日本在住の米山学友に対する就職意識調査	4
3.	ロータリアンに対する外国人留学生雇用状況と 就職支援に関する意向調査	6
第4章	今後の方向性の検討	8

【別冊】 「米山奨学生・学友の就職支援に関する調査」調査報告書

第1章 調査の背景と目的

累計奨学生数は13,900人に

(財)ロータリー米山記念奨学会(以下、当会)は、財団法人化以前の1958年以来、半世紀にわたって、日本の大学・大学院で学ぶ外国人留学生を支援してきた。日本経済の発展、そして日本ロータリーの発展とともに、奨学金原資であるロータリアンの寄付金も飛躍的に増加。バブル崩壊以降、未曾有の長期不況による寄付金の低迷期を迎えてなお、他の奨学団体の追随を許さない年間800~1,000人を支援し、民間第1位の奨学規模を維持し続けた結果、これまでに支援した奨学生数は13,902人(2007年4月現在)に上る。

優秀な学友とのネットワーク化の方策として

数の多さだけでなく、特筆すべきは、これら奨学した留学生の「質」にある。特に、2003年度制度改編以降、奨学生の採用基準は学業・人物両面の「優秀性」に主眼が置かれたこともあって、現在の奨学生の85%が修士・博士課程履修者によって占められている。13,000人を超える元米山奨学生(米山学友)のうち、博士号取得者は3,000人に近い。この高度な人材のリソースが活用されることなく、奨学期間終了後にはその多くが散逸し、ロータリーとは「音信不通」となってしまう現状は、非常に惜しむべき状況と言えよう。これら学友のネットワーク化を図るための取り組みが今、当会には強く求められており、今回の「就職支援」もその一つの方策として浮上した案である。

学友とロータリアンのニーズをつなぐ

卒業後は日本で就職したいと希望する外国人留学生は多い。事実、米山学友のうち3,000人以上は日本に在住しており、この中にはまだ学生の者も含まれるが、すでに企業や大学で働いている者も多い。一方、人口減少に向かう日本社会では、外国人労働者受け入れの議論が加速しており、政府・経済界ともに、高度な技能をもつ人材としての外国人留学生の存在に注目し始めている。ロータリアンが職業人の集団であることを考えれば、この経済界の動きと同様に、外国人留学生、特に米山奨学生のように優秀性を保証され、奨学期間を通じてロータリーの奉仕の精神に触れた経験をもつ人材の雇用に関心をもつ人は多いと予想される。米山奨学生・学友に日本に就職したいというニーズがあり、ロータリアンにも彼らのような優秀な留学生を採用したいというニーズがあれば、それらをつなぐことによって、奨学期間終了後の米山学友とのネットワークを強化できると同時に、彼らの能力を社会に還元することに貢献できるのではないかと――。

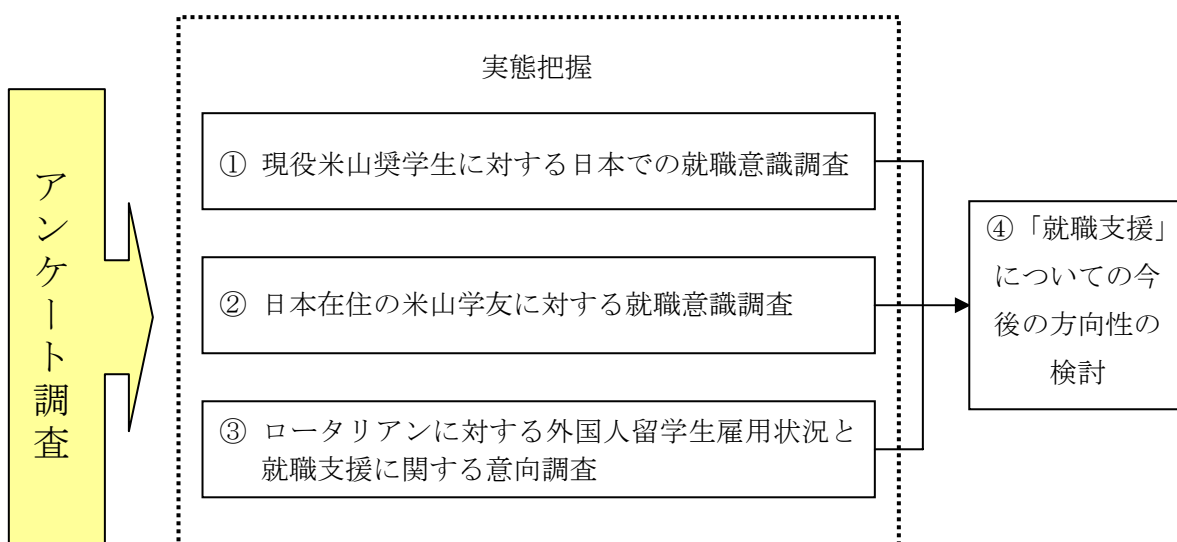
就職支援に関するニーズの把握から今後の方向性の検討へ

以上の背景から、今回の調査は、まず「米山奨学生・学友」側、「ロータリアン」側それぞれのニーズを把握することを目的として行うものである。その結果から、就職支援について、今後の方向性を検討する。

第2章 調査の概要

1. 調査フロー： 本プロジェクトの調査フローは、以下の通りである。

「米山奨学生・学友」には、日本での就職意向や就職支援の必要性を問い、現役奨学生と学友との意識の差も検証する。また、「ロータリアン」には、外国人留学生の雇用ニーズの有無や、当会が就職支援を行うことについての意向を問う。



2. 調査方法： インターネット調査
(当会サーバー上の専用サイト URL を Eメールにて案内)

3. 調査期間： 2007年2月1日(木)～2月20日(火)

4. 対象者： 上記① 現役(2006学年度)米山奨学生【有効配信数641件】
② 学友(元米山奨学生)【有効配信数1,470件】
ただし、奨学期間終了後10年以内で日本に在住する者
③ ロータリアン：下記へアンケートの協力依頼をした

- 理事、監事、地区米山奨学委員長・委員、米山カウンセラーなど「ハイライトよねやま」配信者819件
- ガバナー事務所経由で各クラブの会長・米山委員長各位
- 全国ロータリアンインターネット協議会(JRIC)投稿による協力依頼

※ 上記①～③は、いずれもEメールアドレスをもつ人が対象

5. 有効回答数： 上記① 現役(2006学年度)米山奨学生： 401件(回答率62.6%)
② 学友(元米山奨学生)： 551件(回答率37.5%)
③ ロータリアン： 1,050件

第3章 各調査の総括

1. 現役米山奨学生に対する日本での就職意識調査

(1) 回答者の属性

- 在学課程では、修士課程が約5割、博士課程が約4割と、**大学院在籍者が9割近い**
- 主な専攻分野では、**工学がトップ** (24%)、次いで、**経営・経済・商学** (14%)、**人文学** (13%) の順に多い
- 出身国では、ほぼ奨学生数全体の比率に近く、**中国が5割近い**

(2) 将来の進路希望

- **6割以上が日本での就職を希望している**
- 希望する就職先の第1希望は「**日本企業**」(約5割)。次いで、「**大学などの教育・研究機関**」(約3割)
- 希望する職種の第1希望は「**研究開発**」。次いで、「**教育・研修**」、「**貿易事務**」が多い。第2希望・第3希望に「**通訳・翻訳**」を挙げる人が多い
- 日本で経験を積む期間として、**10年以内**を想定している人が多い (6割)

(3) 就職活動について

- 就職活動をしたことがある人は**約4割**。具体的な活動としては、「**インターネットの就職情報サイトからの応募**」、「**就職セミナーや企業説明会を通じての応募**」が多い
- 就職活動する上で、5割近い人が「**外国人ゆへの差別**」を感じている。「**日本語によるコミュニケーションの不自由**」を感じた人は多くはない (2割以下)

(4) 就職の相談

- ロータリアンに就職について相談したことがある人は**約4割**
- ロータリアンから就職先の紹介など実質的な**就職支援**を受けた人は**約2割**
- 米山記念奨学会による就職支援の希望としては、「**求人情報の提供**」が最も多い (8割)

(5) 自由意見 (主な意見を抜粋)

- ロータリアンからの就職支援を**歓迎・感謝** (多数)
- 日本で就職した先輩学友の**経験談**が聞きたい (多数)
- 専攻分野のロータリアンと相談ができるような**つながりやシステム**があると良い (その他、**ビジネスマナーや会社文化**など、ロータリアンならではの話が聞ける機会があるとよい) (複数)
- **職場体験やインターンシップの受け入れ**、**企業見学会**などの支援があると良い (複数)
- 母国に帰国後の**ロータリークラブとの連絡**を確保したい

- 就職は自分の力ですべき。ロータリアンや米山奨学会を頼るべきでない（複数）
- ※ （多数）：10名以上の回答 （複数）：2名以上の回答

<総括>

米山奨学生の6割以上が日本での就職を希望している。その半数は、日本企業が第1志望で、希望職種は「研究開発」がトップである。日本で働く期間は、「10年以内」を想定している人が多い。

ロータリアンに就職について相談したことがある人は約4割で、そのうちの2割近い人が「就職先の紹介」などの支援を受けている。米山記念奨学会による就職支援の希望では、「求人情報の提供」が圧倒的に多い。自由意見では、「日本に就職した先輩学友の経験談が聞きたい」というニーズが多く聞かれた。また、インターンシップや企業見学など、就職の前段階として職場体験の支援を期待する声もあった。

2. 日本在住の米山学友に対する就職意識調査

（1）回答者の属性

- **博士課程修了者が4割**。そのほか、博士課程在学中が2割、修士課程修了者が3割と、非常に高学歴である
- 主たる専門分野では、「工学」（23%）と「経済学・経営学・商学」（20.7%）が多い
- 現在の居住地では、**首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）が4割を占める**
- 出身国・地域は、**中国が6割を占める**
- 在留資格は、「留学」が最も多い（27%）。就労している人の在留資格では「**人文知識・国際業務**」が最も多い（20%）。「永住者」も1割に上る

（2）現在の状況

- **約6割の人が企業や大学に勤務**している。勤務先は、日本企業が多い（35%）。一方、まだ学生の人でも約3割に上る
- 現在の勤務先を見つけたきっかけは、「**友人・知人からの紹介**」（27%）が最も多い
- どのくらいの期間、日本で働きたいかは「**わからない**」という人が多い（25%）
- 将来の希望は、「**母国で起業**」がトップ（19%）。以下、「日本企業で働き（続け）たい」（15%）、「日本での起業」（11%）、「母国の大学・大学院で研究」（11%）が続く
- 日本で働く上での苦勞では、「**外国人の出世が難しい**」を挙げる人が3割に。一方で、「特に苦勞していることはない」という人も多い

（3）就職の相談

- ロータリアンに就職の相談をしたことがある人は3割
- ロータリアンから就職先の紹介など実質的な就職支援を受けた人は約2割
- 米山記念奨学会による就職支援の希望としては、「求人情報の提供」が最も多い（8割）

（4）自由意見（主な意見を抜粋）

- ロータリアンからの就職支援を歓迎・感謝（多数）
- 現在、日本で就職することに不安や困難を感じている（多数）
 - 【主な理由】高年齢、女性、文系の博士課程修了者、就職試験が外国人に不利
- 正社員でなく、契約社員や派遣社員として雇われる傾向への不満（複数）
- 日本の企業風土への不満（複数）
 - 【主な理由】残業が多い、上司との関係、外国人が出世できないことなど
- 日本で就職する心構えについての後輩留学生へのアドバイス（複数）
- 学友と学友の間、そして、奨学生と学友の間の交流や情報交換を図るべき（複数）
 - ー日本で就職している学友の就職経験談をレポートにまとめて、後輩に提供すべき
- 就職先の紹介は学生のためにならない（複数）
 - ー職は自分で探すべき、まず自分の力で挑むべき
 - ー依頼心で闘志が無くなるのではないか。心理的なカウンセリングの方が学生のためになる
 - ー就職の大変さは日本人の学生も奨学生以外の留学生も体験していること。重要なのは、日本社会で生活していく上で必要な情報（社会保障制度などを含めて）を分かりやすく伝えるためのサポート体制づくりであって、精神面のサポートの方が大切

※ （多数）：10名以上の回答 （複数）：2名以上の回答

<総括>

日本に在住する米山学友の6割が博士課程に進んでいる。回答者の6割が日本企業や大学に勤務している。就労者の在留資格では「人文知識・国際業務」が多い。将来は、母国での起業や研究を希望する人も多いが、日本での勤務や起業を希望する人も同程度に多い。

ロータリアンに就職について相談したことがある人は3割。現役奨学生と同じく、そのうちの2割近い人が「就職先の紹介」などの支援を受けた経験がある。米山記念奨学会による就職支援の希望では、現役奨学生と同じく「求人情報の提供」が圧倒的に多く、その他の支援の希望は、現役生と比べると低くなる。

一方、少数ではあるが、「就職支援（就職先の紹介）は必ずしも学生のためにならない」という意見もあった。むしろ精神的なサポートや学友間、学友・奨学生間の交流の場を広げることが必要との認識が学友側にもある。

3. ロータリアンに対する外国人留学生雇用状況と就職支援に関する意向調査

(1) 回答者の属性

- 「クラブ会長」経験者（47%）、「クラブ米山委員長」経験者（37%）、「米山奨学生のカウンセラー」経験者（30%）が多い
- ロータリー歴は「20年以上」が最も多く（24%）、「5年未満」が最も少ない（15%）が、大きな偏りはない

(2) 留学生（元留学生）採用経験

- 「採用経験がある」あるいは「今後採用したい」とする人は3割。首都圏ではその比率が高くなる
- 募集方法で最も多かったのは、「友人・知人からの紹介」（37%）。縁故採用または関係機関からの依頼による採用が多い
- 雇用形態は、「パート・アルバイト」と「正規従業員」がそれぞれ4割強。「有期雇用契約」は2割で、平均契約期間は2.3年であった。「その他」では、インターンシップや企業研修生としての受け入れ経験が挙げられた
- 採用理由は「国籍に関係なく優秀な人材を確保するため」がトップ。「海外への進出・販路拡大・ネットワークづくりのため」、「日本人従業員の国際化のため」も多い
- 採用の問題点として、5割の人が「文化・習慣の違い」を挙げている。「採用経験なし、今後は採用したい」の層では、「定着性」「募集方法」への懸念が大きい。反対に、「採用経験あり、今後の採用予定あり」の層では、「特に問題はない」が多くなる
- 奨学生・学友の履歴書閲覧サービスがあれば利用したいかどうかについては、全体では、6割以上が「利用したい」と回答している。このサービスへの期待度が最も高いのは「採用経験なし、今後は採用したい」の層で、「利用したい」は7割を超える

(3) 身近な留学生採用の需要

- 回答者本人以外に、身近に外国人留学生採用の需要があるかどうかについては、「心当たりがない」が約7割であった

(4) 米山奨学生・学友からの就職相談

- 「米山理事」「地区米山委員長・委員」「米山奨学生のカウンセラー」経験者では、約4割の人が米山奨学生・学友から就職について相談された経験があると回答している
- 就職相談に対する対応では、「アドバイス」が7割と最も多いが、具体的な支援として、「就職の相談に乗ってくれそうな人を紹介した」が3割以上、「就職先を紹介した」人も2割近くと、現状においても個別対応の就職支援が行われていることが伺える

(5) 当会が米山奨学生・学友に対する就職支援を行うことについて

- 全体では、「積極的に支援した方がよい」が4割近く、「積極的に進める必要はないが、

何らかの支援をした方がよい」が5割、「特に何もしなくてよい」は1割であった。「積極的に」の比率は、今後の採用に意欲的な層では約6割と高くなる

- 5割を占める「積極的に進める必要はないが、何らかの支援をした方がよい」の回答者は、自由記述の意見を見ると、肯定的な意見から否定的・懐疑的な意見まで、幅が広い。「何らかの支援」の解釈が、人によっては「個人的に相談に乗る」レベルであって、「米山奨学会としての組織的な支援」を指していないと思われる回答もある。「高学歴の米山学友の就職ニーズと、ロータリアンの雇用ニーズが合わないのでは」という懸念、また、紹介者として米山奨学会が介在することで、何かトラブルが起きた場合の責任問題が生ずる懸念も挙げられている。また、「そもそも米山奨学生が日本で就職したいと思っていることを知らなかった。まず、ロータリアンにそれを知らせるべきでは」（複数）との意見も見られた
- 1割を占める「特に何もしなくてよい」の回答者の自由記述意見を見ると、「奨学生には、母国で活躍してほしい」が圧倒的に多い。また、「そもそも就職は自分の力で切り開くべきもので、米山奨学会がそこまで世話をしなくてよい」（複数）という意見も見られた
- 具体的な就職支援策としては、「求人情報の提供」が6割超でトップ。「就職カウンセリングの実施」が5割弱、「シンポジウム・説明会の開催」が3割強であった。「その他」の回答では、「米山奨学生・学友の求職情報を会員に提供する」、「会員企業での職場体験や見学」、「企業側への働きかけ」、「就職活動に関わる経費の支援」などが挙げられた

<総括>

外国人留学生を採用したいというニーズは、確かにロータリアン側にも存在し、特に、首都圏（東京・神奈川・埼玉に所在する地区）でのニーズは、その他の地域に比べて高い傾向にある。採用したい理由のトップは「国籍に関係なく優秀な人材を確保するため」で、奨学生・学友の履歴書閲覧サービスがあれば、6割以上が「利用したい」と回答している。

「米山理事」「地区米山委員長・委員」「米山奨学生のカウンセラー」経験者では、約4割の人が米山奨学生・学友から就職について相談された経験があり、「就職につながりそうな人の紹介」や「就職先の紹介」など、すでに個別に就職支援は行われている実態がある。

米山奨学会として就職支援を行うことについては、「積極的に進める必要はないが、何らかの支援をした方がよい」という意見が最も多い（5割）。しかし、自由意見を見ると、この層の回答者の意見は、肯定的な意見から否定的・懐疑的な意見まで多岐に渡り、一概に就職支援に「賛成」とは捉えられない。奨学生・学友とロータリアンとのニーズが合わないのではないかと、トラブル発生時の責任問題などへの懸念も挙げられており、留意が必要と思われる。

第4章 今後の方向性の検討

就職支援のニーズは確認

今回の調査結果によって、当会が米山奨学生・学友に対する就職支援を行うことについて、奨学生・学友側、ロータリアン側の双方に、一定のニーズがあることは確認された。具体的な就職支援策としては、「求人情報の提供」が最も望まれている。また、6割以上のロータリアンが、奨学生・学友の履歴書を閲覧できるサービスを利用したいと回答していることから、「求職情報の提供」についても相応の需要があると考えられる。

「求人／求職情報の提供」は有効か

しかし、その実現性を考える際、最も懸念されるのが、「就職／雇用ニーズのミスマッチ」である。今回の調査結果で明らかな通り、日本在住の米山学友の6割以上が博士課程に進学している。当然年齢も高い（現在の奨学生の平均年齢は29歳。奨学期間終了後10年以内と限定した今回の調査対象学友の平均年齢は30代後半と考えられる）。通常の日本企業では「高学歴・高年齢」は就職・転職に不利とされることを考えると、中小企業が中心のロータリアン企業で、このような高学歴・高年齢の外国人の雇用ニーズがどれほどあるかは疑問である。多額の費用をかけて求人・求職情報の提供システムをつくったとしても、そこで実現できる就職支援の件数は多いと思われない。

また、法人としてのリスク管理を考える上では、ロータリアンの自由意見の中で懸念されている「紹介者責任の発生」にも留意が必要である。

今後の行動計画

以上の通り、「求人・求職情報の提供」には慎重な検討が必要であるが、そこに一足飛びに向かう前に、ほかに望まれている就職支援策があるのではないか。奨学生の自由意見では「先輩学友の経験談が聞きたい」といったニーズが多く見られ、学友からも自らの体験に基づく後輩へのアドバイスが多い。また、「専門分野に携わるロータリアンとの交流」や「職場体験の提供」、「日本的な仕事観やビジネスマナーについて、ロータリアンから話が聞きたい」など、交流・体験の機会の充実を求める声も強いことがわかる。同様に、ロータリアンからも「社会で活躍する人と知り合う場の提供」や「ロータリアン企業でのインターンシップや職場見学」といった支援策が提案されている。

そこで、2007年度は就職支援検討の第2フェーズとして、以下2点に取り組みたい。

1. 日本で就職している学友の就職経験談を収集し、奨学生・学友に提供する
2. 「就職」をテーマとした、奨学生・学友・ロータリアンの交流会もしくはセミナーの実施検討（需要の最も多いと思われる首都圏での試験的開催）

このような取り組みを通じて、奨学生・学友側、ロータリアン側の実際のニーズの把握や意見収集をさらに進めるとともに、2007年度に学務で行う学友追跡調査の結果も勘案して、2008年度以降の対応を検討することとしたい。

以上